

# 和泉市久保惣記念美術館

常設展示

## 源氏絵



槿より

平成2年3月1日(木)～3月25日(日)

午前10時～午後5時(入館は4時30分まで)

月曜休館

〒590-02 大阪府和泉市内田町85

TEL. 0725-53-1071

平安時代、十一世紀の初頭、源氏物語が成立して以来、その絵画化すなわち源氏絵は、絵巻、冊子、画帖、扇面、屏風などとして数多く製作され、工芸品にも多く意匠としてとりいれられた。源氏絵は、単独、あるいは数ヶ所の有名な場面を特別に選ぶ場合もあるが、源氏五十四帖の各帖から、ひとつ以上の場面を選びワン・セットとし、情景を視覚的に味わいながらおおよそのストーリーをおえる様に構成されている場合もある。

室町時代末期から江戸時代前期にかけては、土佐派、狩野派、宗達派をはじめ数多くの絵師達により源氏絵が描かれているが、なかでも土佐派は、画帖など小画面の細密な源氏絵の製作にその腕を揮っている。

今回陳列する源氏物語手鑑はもと四十枚の折帖で、一葉ごとの表裏に、上下に詞書と絵が貼られていたのを都合八十枚の台紙に貼りなおしたものである。改装時には絵の裏に「土佐久翌」の重郭円形印と、詞書の裏に揮毫依頼書風の名前とが確認されたというが、台紙の上方の小さい付箋に記されている詞書の筆者名は、おそらくこれに拠ると思われる。いま一番、二一番、四一番、六一番の台紙にのみ「土佐久翌」重郭円形印が貼られている。源氏物語手鑑の名称については、もとの帖の表紙の題箋に「光源氏手加々美」とあるところから充てられたのであろうが、残念ながら以上の事以外に改装時の状況は詳らかでない。

詞書の料紙には金銀、まれには墨で秋草、松樹、藤、桜に流水など様々の文様が描きわけられ、一枚として同じ図様はない。寸法は縦十七又は十九センチ前後の場合が多く横は一定しない。筆者については今後研究しなければならないが、付箋に拠ると、烏丸中納言、飛鳥井中納言、冷泉三位、中ノ院少将、持明院少将など能書家や御家流の書をよくした公家達二十名になる。因に烏丸家では光廣（一五七九―一六三八）が慶長十七年より元和二年まで権中納言に任官されている。

絵は、五十四帖から、有名な場面を中心に八十選ばれ、土佐派独特の細密な筆致で、金銀をふんだんに駆使し、絵具は鮮麗かつ濃厚である。寸法は縦一九・八センチ前後、横二六センチ前後とほぼ一定である。

土佐光吉（天文八―慶長十八）は、剃髪して久翌（休翌・休欲）と号した桃山期における土佐派の代表的画人である。土佐光茂の門人であったが、宗家の光元が秀吉に従軍して但馬方面で戦歿した永禄十二年以後は、土佐派を継承し、堺に居を構えて作画活動を行った。

画の特徴は「動勢無く美細を要る」（『丹青若木集』）、「筆法は専ら規矩を守る」（『本朝画史』）などと土佐派が評されているように、金銀・濃彩を多用した細密画で、大和絵の伝統的技法・作り絵に則ったものである。

『凶画考』などの画伝類には、源氏物語小画・秋野日月屏風・利休肖像などが伝えられているが、現存する作品は少ない。わずかに源氏物語を主題にした作品が数点知られており、本手鑑は「源氏物語図画帖」（京博）とともに、光吉画の基本資料である。金碧障屏画全盛期における絵画制作の一端を知る上で欠かせない。

左のリストは八十枚全部をかかげ、今回陳列のもの四十八枚は上部に○印をほどこした。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
○ 一番 桐壺一	桐壺の巻は後の光源氏の誕生から十二歳で元服するまでの物語。 この場面は、源氏七歳の頃、父の桐壺帝が源氏を鴻臚館（外国人接待の為の館舎の名）で相人（人相見）にみせるところ。 後、帝はこの皇子を臣籍に下げる決意をする。
○ 二番 桐壺二	十二歳、清涼殿での元服の場面。源氏はまだ髪を角髪に結び着座している。帝は椅子に坐り、顔は御簾の内、衣冠束帯で裾を長く引くのが加冠役の左大臣。後、姫の葵上を正妻とする。
○ 三番 帚木一	源氏十七歳の夏の長雨の宵。源氏は着物の紐を結ばずにしどけない姿で、女から届いた恋文を頭中将にみせる場面。他の二人は左馬頭、藤式部丞。後にいわゆる雨夜の品定め（理想の女性論）の段となる。
○ 四番 帚木二	左馬頭が語った「さればみすきたる」女の話。神無月の月夜、菊、紅葉が趣ある邸内、友人の殿上人の吹く笛に、女は簾の内で和琴を合す。戯れかかる歌を詠む殿上人に女は歌を返しさらに箏の琴を弾く。原文に拠ると荒れた築地のくづれより左馬頭がこの様子をつかっている。
○ 五番 空蟬	源氏は、伊予介の妻、空蟬が忘れられず、ある夜、寝所へ忍び込むが空蟬は小桂を脱ぎ捨てて去り、源氏はこの小桂に心情をたくし、詞書にある「空蟬の……」の歌を詠む。
○ 六番 夕顔一	源氏は六条御息所訪問の途中、ある家の白い花に目をとめ、その家の女童から扇にのせた夕顔をもらう。
○ 七番 夕顔二	霧の深い早朝。六条御息所の邸を出ようとする源氏は、見送りの女房の美しさに心を引かれて歌を詠む。御簾越しに見送るのは御息所。
○ 八番 若紫	若紫の巻といえば、源氏が「わらわ病」快癒の為赴いた北山のある僧房で、後の紫上を見出す場面が有名であり、多くの源氏絵がこの場面をとりあげているが、この手鑑では、その後の場面、みやまおろしの風に伴ってきこえてくる懺法（罪を懺悔する経典を誦する法要）の声に感涙をもよおす場面を採用している。
○ 九番 末摘花一	梅の香のゆかしい十六夜、源氏は末摘花の邸を訪れるが、透垣の外で頭中将と出会ってしまう。末摘花は御簾の奥で琴を弾く。右上方雲間に十六夜の月。 七弦の琴は琴の中でも最も格の高いものとされ、源氏物語では、源氏、末摘花の父の常陸宮などが名手とされる。
○ 十番 末摘花二	末摘花の邸で過した翌朝、橘の木の雪をほらわせる源氏。容姿こそ勝れていないが、古風な気立てでは、後に源氏の庇護を受ける因となる。
○ 十一番 紅葉賀	源氏が元旦の朝拝に赴く前、二条院の西の対に住む紫上（十歳頃）を訪れる場面。紫上はひいな遊びをしており、源氏は「今日からはひとつおとなになられましたか」とほえみかけている。 この帖の名は、桐壺帝の行幸の際、源氏が冠に紅葉を挿し、青海波を舞うのに因んでいる。
○ 十二番 花の宴	右大臣邸の藤の花の宴の夜、六君（朧月夜君）と再会する場面。源氏は遣り戸からあがり込もうとしているところ。御簾左下方に出衣。（女房の衣の襟、袖口などを簾の下から出すこと）空には弓張月。後、右大臣側の不興をかい、須磨へ退く一因となる。
○ 十三番 葵	賀茂の齋院の御禊の日、葵上の車と、六条御息所の車とが、車の立てる場所をめぐる争う場面。 後、御息所の生霊が葵上にとりつき、葵上は男子（夕霧）を産み、息絶えてしまう。
○ 十四番 賢木	六条御息所が娘の齋宮と共に伊勢へ下向しようとするのをひきとめるべく、源氏が野の宮を訪う場面。源氏の手には神をもたせており、文と共に贈ったと思われる。画面左方には、野の宮の象徴である黒木の鳥居と小柴垣を配置している。
○ 十五番 花散里	五月雨の珍しく晴れた日、花散里を訪ねる途次の源氏に昔逢った女の家から琴の合奏が聞こえる。桂の木の追風に昔を思い出し、折からの郭公の声に促されて惟光を遣わすがおもしろい返事はなかった。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
十六番 須磨	源氏二六歳の頃、須磨に退去するが、その年の仲秋の名月の夜、雁のつらなう鳴く姿に、沖合をながめながら、心情をたくして歌を詠むところ。遠景には、こぎ行く舟、雁の群、右隅に満月を、近く前栽には、萩、薄紫苑などを配している。
十七番 明石一	うらかな春、去年植えた桜の若木が花をつけた。須磨の侘び住いは、源氏に都への想いをつのらせる。 〔注〕付箋帖名は明石一となっているが、詞書・絵ともに須磨の帖の内容を示している。
十八番 明石二	源氏を娘婿にと望む明石入道は須磨から自邸に源氏を迎え入れる。四月のあるのどやかな夕月夜に源氏は箏を、入道が琵琶を奏する場面。庭の秋草は物語の時節にそぐわない。
十九番 濔標一	五月雨の頃、花散里を訪ねた源氏。朧月のもと、花散里は折しも水鶏の近く鳴くを機に源氏を月に託して歌を詠む。
二十番 濔標二	源氏帰京後の住吉詣。帝から賜わった童隨身は美しい装束をし髪は角髪姿である。朱の鳥居と砂浜に松原で住吉を表わし、偶然同じ日に参詣した明石上は沖の船より、このはなやかな一行をながめている。
二一番 蓬生	源氏が四月のある夕月夜、松にかかる藤に心ひかれて立ち寄った荒廃した邸で、末摘花と再会する場面。蓬の露を馬の鞭ではらうのは惟光。
二二番 関屋	源氏二九歳の秋。石山詣の途中、逢坂の関で上洛する常陸介と空蟬の一行に出逢う。道をゆずる常陸介一行。後日源氏は空蟬と消息をかわす。
二三番 絵合	源氏三二歳の三月、冷泉帝の妃、梅壺女御と弘徽殿女御が御前で絵合せをするが、最後に、源氏の須磨の絵日記が人々の心をとらえ、源氏の応援する梅壺方の勝となる。この場面は源氏の思慕する藤壺中宮の前に両者の絵を納めた箱が置かれている。
二四番 松風	明石からようやく上洛し大井に住む明石上を源氏は嵯峨の御堂の用を口実に訪れる。この場面は源氏を慕い遅れて参上した殿上人が狩のしるしとして萩の枝につけた鳥を献上し、源氏は大御酒で饗応しているところ。後、大御遊が始まる。
二五番 薄雲一	明石の姫君が紫上の養女となるべく、大井の邸から二条院にひきとられる場面。別れを悲しみ、抱いているのは母の明石上。女房が時絵の箱の蓋に納め、さしだしているのは守り刀と天児（子供のお守りとして傍らに置く人形）。
二六番 薄雲二	明石上の寂しさを慰めに大井邸を訪ねた源氏。大井川に浮かぶ鶴舟の篝火に我身のつらさを詠む明石上。
二七番 檜	桃園宮に住む檜（朝顔斎院）に心を寄せる源氏は、紫上の煩悶をよそに、雪の夕暮、桃園宮を訪ねる。西門の錠が錆びついてなかなか開かない。
二八番 乙女	この帖では源氏（三三歳→三五歳）は太政大臣になり栄達の途につくことになる。六条には大邸宅も造営され、春の趣き深い庭を配する東南の一画には源氏、紫上、明石姫君、秋の庭を配した西南の一画には秋好中宮（絵合の帖の梅壺女御）東北、西北の一画には花散里、明石上がそれぞれ住んでいる。この場面は、里下り中の秋好中宮が女童に色とりどりの秋の花や、紅葉をもたせて紫上に遣わすところ。その上に中宮の文をのせている。
二九番 玉鬘一	夕顔の遺児、玉鬘の一行が長谷寺参詣の折、檜の宿坊で、かつて夕顔に仕えていた右近と出会う場面。画面左下方と横になっているのが玉鬘か。これが契機となり、源氏の耳に届き、玉鬘は六条院に迎えられる。
三十番 玉鬘二	年末、源氏は新春用の衣裳配りをする。おとなびた女房が御衣櫃から衣裳をとりだしたり、衣箱にいれて届けようとしている。源氏の傍らの紫上は、衣裳の色目、文様などからまだ会ったことのない明石上、花散里、玉鬘達の人柄、個性を想像している。
三一番 初音	源氏三六歳。六条院の元旦、女君達への年賀が華いだ霏圍気のなかで行なわれる。まず紫上方で長寿健康を願う歯固めの祝をする。
三二番 胡蝶	春、三月二十日すぎ、六条院での秋好中宮の御読経の初日に、紫上は法要の花を鳥、蝶の装束をさせた童にもたせ鑄首の舟に乗せて贈る場面。原文には「……鳥には銀の花瓶に桜をさし、てふは金の瓶に款冬（山吹をさす）」とあるが、画面でも忠実に描き分けられている。紫上としては乙女の帖での秋の花や紅葉の返礼の意味もある。

付箋番号及び帖名	場面の内容概略
三三番 螢一	六条院にひきとられた玉鬘は養父源氏から懸想され当惑する。美しい玉鬘の評判をきいて思いをよせる螢兵部卿宮が源氏のはからいにより、螢の光で玉鬘を垣間見る場面。几帳ごしに螢とその光がほのかにみえる。
三四番 螢二	五月五日、六条院の馬場で催された騎射の競技と競馬。見物の殿上人も思い思いの装いで集う。
三五番 常夏	夏の暑い日源氏が、東の釣殿で涼んでいる場面。鮎や鰻を調理させ賞味しようとしている。赤い口覆いの瓶には水水か酒か。
三六番 篝火	源氏三六歳の初秋、玉鬘と琴を枕に臥し、歌を贈答する。外の様子は原文の「……いと涼しげなる遺水のほとりにけしき殊にひろごり臥したる檀の木の下に、打松・おどろ／＼しからぬ程におきて……」のとおり。篝火は月がない為、源氏が配慮して、ともさせている。打松とはたいまつのこと。
三七番 野分	夕霧が父源氏の名代で秋好中宮の野分見舞に参上し、遠くから目にした光景である。女童達は強い野分に荒された庭の秋草のなか、虫籠を手に露をかはしたり、風でいたんだ撫子を手にとったりしている。脇息にもたれているのが秋好中宮。
三八番 御幸一	十二月、冷泉帝の大原野行幸の光景。手前には鳳輦（天皇の儀式、行幸に用いる）を配し、帝が大原野に到着した体になっている。遠くは狩をする様を、この手鑑では珍しく広い視界でとらえ小画面におさめている。源氏は供奉せずに、御酒などを奉っている。
三九番 御幸二	物忌みのため、鷹狩りの行事にお供しなかった源氏のところへ、冷泉帝より雉二羽をつけた柴の枝が届けられた。
四十番 藤袴	大宮の喪に服している玉鬘のもとを、同じく服喪中の夕霧が源氏の使いで訪れた折、藤袴の花と求愛の歌を贈る。両者共、鈍色（薄墨色）の喪服姿。夕霧が冠の纒を外巻きにしてとめているのは凶事の作法である。この時すでに玉鬘は尚侍出仕が決定している。
四一番 真木柱	源氏は玉鬘を髭黒大将に嫁がせる決心をする。髭黒は玉鬘を自邸に迎える準備をすすめ、ある雪の夜、玉鬘を訪れようとしたやさき、傷心の北の方に物怪がつき、火取香炉の灰をうしろからあびせる場面。畳に炉がきつてあるが当時の習慣にはない。
四二番 梅ヶ枝	帖の名は、娘が邸を去る時、柱の刻目に別れの歌を書いた文を挿した事による。
四三番 藤裏葉	源氏三九歳の春、二月十日、丁度、雨がすこし降り、紅梅のゆかしい頃、薫物競べが催された。その夜、源氏は螢兵部卿宮に装束一揃、薫物二壺を届けるところ。
四四番 若菜一	髭黒左大将の北方玉鬘が振分髪・直衣姿の幼子二人とともに源氏四十の賀を祝う。祝儀の若菜が各自に出される。賀の後、女三宮が源氏に嫁し、正室となる。
四五番 若菜二	六条院で明石女御が皇子を出産。皇子を抱くのは紫上か。明石上は御湯殿の世話役を立派に務める。部屋奥に湯桶、角盥、木製の桶などを描いている。
四六番 若菜三	正月二十日頃、庭の梅のさかりの静かな宵、女三宮の部屋での女楽の場面。左端、脇息にもたれているのが明石女御。まんなかが六弦の和琴、（図では十三弦の箏になっている）を弾く紫上。右が七弦の琴を弾く女三宮。後姿が琵琶を弾く明石上。御簾の外では夕霧が明石女御の弾く箏の調子をあわせている。その横で玉鬘の子供達が笙、横笛を吹いている。
四七番 若菜四	朱雀院五十の賀の試楽。衆人は「仙遊霞」を奏す。髭黒大将、夕霧、螢兵部卿宮の御子達四人は「萬歳楽」を舞う。廂からは源氏が見守る。
四八番 柏木一	女三宮を忘れられず、密会した柏木は自責の念から煩悶し、病床に臥してしまふ。両親が加持祈禱をさせる為、聖を呼んで対座しているところ。柏木は後、むなしく他界してしまふ。女三宮は不義の子薫を生み、髪をおろし受戒する。





源氏物語主要人物系図 — 源氏物語手鑑に登場する主要人物 —

